

モノ化についてのフェミニストの見解

エヴァンジェリカ (リナ)・パパダキ

ChatGPT & 江口聡訳 *

2024-12-01

この文書をレポートで参照・引用する場合は、文献表では以下のように表記すること。

エヴァンジェリカ (リナ)・パパダキ (2024) 「モノ化についてのフェミニストの見解」、講義資料、12月1日版

Papadaki, Evangelia (Lina), "Feminist Perspectives on Objectification", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Summer 2024 Edition), Edward N. Zalta & Uri Nodelman (eds.), URL = <https://plato.stanford.edu/archives/sum2024/entries/feminism-objectification/>.

「モノ化」(objectification) はフェミニスト理論において中心的な概念である。それは、通常女性を一個のモノ(an object、オブジェクト)として、人をモノとして見たり扱ったりすることと大まかに定義できる。このエントリーでは主に性的領域で生じるモノ化、すなわち性的モノ化に焦点を当てている。マーサ・ヌスバウム(Nussbaum 1995, 257) は、人をモノとして扱うという考えに関連する以下の7つの特徴を特定している。

道具性 (Instrumentality) 他者を、自分の目的を達成するための道具として扱うこと

自律性の否定 (Denial of Autonomy) 他者が自律性や自己決定能力を欠いている存在として扱うこと

不活性 (Inertness) 他者を行動能力や主体性を欠く存在として扱うこと

代替可能性 (Fungibility) 他者を他のモノと交換可能な存在として扱うこと

侵害可能性 (Violability) 他者を境界性や身体的統合性を欠く存在として扱うこと

所有権 (Ownership) 他者を他人に所有される存在(売買可能なもの)として扱うこと

主観性の否定 (Denial of Subjectivity) 他者の経験や感情を考慮する必要のない存在として扱うこと

レイ・ラングトン(Langton 2009, 228-229) は、ヌスバウムのリストにさらに3つの特徴を追加している。

身体への還元 (Reduction to Body) 他者をその身体や身体の一部と同一視して扱うこと

外見への還元 (Reduction to Appearance) 他者を主にその見た目や感覚にどのように映るかという観点で扱うこと

*ほとんど ChatGPT 君がやってくれました。It ain't illegal, yet!

沈黙化 (Silencing) 他者をあたかも沈黙しているか、発言能力を欠いているかのように扱うこと

モノ化を論じる思想家の大多数は、それを道徳的に問題のある現象と捉えている。この傾向は特にポルノグラフィに関するフェミニストの議論において顕著である。反ポルノフェミニストであるキャサリン・マッキノンやアンドレア・ドウォーキン、イマヌエル・カントのモノ化の概念に影響を受け、男性がポルノを消費することによって、女性全体が男性の目的のための単なる道具の地位に引き下げられていると主張している。さらに、サンドラ・バートキーやスーザン・ボルドーのようなフェミニストは、女性が外見に過剰にこだわることでモノ化されていると論じている。また、最近では、フェミニストたちが客観性とモノ化の関係を探る研究にも力を注いでいる。一方で、マーサ・ヌスバウムのような思想家は、モノ化が必ずしも否定的な現象であるとは限らないという考えに異議を唱え、肯定的なモノ化の可能性を主張している。ヌスバウムは、人をモノとして扱うこと（上記のいずれかの方法で）がしばしば問題である一方で、特定の文脈では無害であるか、さらには肯定的な形をとり得ると主張している。彼女によれば、モノ化は私たちの生活において貴重で楽しい部分を構成することもあり得る。また、ナンシー・バウアーは近刊の著作において、「モノ化」という用語の特徴や基準を特定すること自体が妥当かどうか疑問を呈している。彼女は、そのような試みは議論の対象となる現象を歪めるだけだと主張している (Bauer 2015)。

目次

1	セクシュアリティとモノ化についてのカント	2
2	ポルノグラフィとモノ化	5
3	女らしい見掛けとモノ化	9
4	客観性とモノ化	12
5	ポジティブなモノ化の可能性	16
6	モノ化の特徴や基準を特定することの無益さ	19
7	結論	20
	参考文献	20

1 セクシュアリティとモノ化についてのカント

イマヌエル・カントの性のモノ化に関する見解は、現代のフェミニストによる議論において特に影響力を持つものである。カントは、セックスが一夫一婦制の結婚という文脈の外で行われる場合、それが非常に問題を引き起こし、モノ化につながると考えた。彼は『倫理学講義』のなかで次のように述べている。

性的愛は愛される人を欲望の対象 (オブジェクト) に変える。その欲望が満たされたとき、その人は吸い尽くされたレモンを投げ捨てるように捨て去られる。……人が他者の欲望の対象 (オブジェクト) となるとき、すべての道徳的関係の動機は機能を失う。なぜなら、他者の欲望の対象となることで、人は

モノとなり、誰にとってもそのように扱われ、使用され得るからだ。(『倫理学講義』163)。

カントにとって、モノ化とは、人間性を備えた存在である人をモノの地位に引き下げることである。カントが言うところの「人間性」とは、個人の理性的本性および理性的選択の能力を指す。この人間性の特徴は、個人が自分自身の目的を理性的に設定し、それを追求する能力にある。人間性を持つ存在は、何が価値あるものかを判断し、それを実現し促進する方法を見出すことができる。人間性は、人間を特別な存在たらしめるものであり、それによって人間は動物や無生物と区別される。この特別性のゆえに、人間は動物やモノとは異なり、「尊厳」(「相対的価値」に対比される「内的価値」)を持つ(Kant 1785, 42)。カントにとって重要なのは、各人が他者のなかの人間性を尊重すること、そして自らの中にある人間性をも尊重することである。人間性は決して単なる手段として扱われるべきではなく、常に同時に目的として扱われるべきだ(カント 1797, 209)。

カントは、一夫一婦制の結婚という文脈を離れてセックスを行うと、人間性が単なる性的目的のための手段として扱われることを懸念している。*Lectures* では、カントはセックスに関連して「格下げ」(degradation)、「隷属化」(subordination)、人間性という「名誉の剥奪」(dishonouring)といった表現を頻繁に用いている。彼はセックスが人間性の喪失、あるいは「犠牲」につながる可能性さえ指摘しており(*Lectures* 163-164)、愛される人が人間としての特別な性質、人間性を失い、単なるモノや性的道具へと還元されると論じる。したがって、カントのモノ化の概念は、主に道具性に焦点を当てている。つまり、人を恋人の目的のための単なる道具として扱うことを指すのである。モノ化とは、カントにとって「モノ、つまり使用の対象として人を見ること」を意味する(Herman 1993, 57)。アラン・ソーブルによれば、カントの立場では、「他者の身体とその従順な行為の両方が、自分の性的快楽のために使用される道具(手段)であり、その意味で他者は交換可能で機能的なモノとなる」(Soble 2002a, 226)。セックスにおいて人がモノの地位に還元され、理性的本性を失うという考えは極端なものだ。ハルワニ(Halwani)はこのようなモノ化がセックスにおいて実際に起こることは稀だと正当に指摘している。彼は次のように説明する。

レイプを除いて、性的パートナーをモノとして扱うことは稀である。私たちは彼らの人間性を認識しているだけでなく、それを尊重している。(Halwani 2010, 193)。

ハルワニは、カントの主張に対してより現実的な読み方を提案している。それによると、次の点に真理があると認められる。「性的欲望は理性を自らの道具とするほどに強力であり、理性的能力による目的設定を覆すことがある」(Halwani 2010, 209)。こうした場合、人は「理性を損なうことで自らの尊厳を危険にさらす」(Halwani 2010, 209)。したがって、セックスによって人間性が完全に破壊されるという見解は魅力的ではないものの、性的欲望やその実践が時に私たちの理性を損なう可能性があるという考えは必ずしも不合理ではない。

カントは、理論上は男性も女性もモノ化され得ると考えていたが、実際には女性がモノ化の最も一般的な被害者であることを十分に認識していた。このことは、売春や愛人というカントの議論に明らかである。こうした道徳的に問題のある性的状況におけるセックスの行使は、女性(売春婦や愛人)を男性の欲望の対象(オブジェクト)へと還元する結果をもたらすとされる。

カントは、売春を「他者の性的満足のために、自身の身体を利益目的で提供する行為」と定義している。カントによれば、人はお金と引き換えに自らの身体を性的に使用させることによって、人間性を失い、モノとなることを避けられない。彼は次のように述べている。

「人は自らを勝手に処分できる存在ではない。自らの手足や、歯一本でさえも売る権利を持たない。しかし、自らの身体を利益のために性的欲望を満たす手段として提供し、自らを欲望の対象(オブジェク

ト) とすることは、自分自身をモノのように扱うことに他ならない」(Lectures 165)。

売春婦の商業化は必然的に彼女のモノ化を引き起こす。すなわち、彼女は「他者が欲望を満たすためのモノ」に還元されるのである (Lectures 165)。カントはさらに次のように述べる。

「人間は利益のために、自らを他者の性的欲望を満たすためのモノとして提供する権利を持たない。そのような行為を行えば、自らの身体が誰にでも欲望を満たす道具として使用される危険を冒すことになる」(Lectures 165)。

カントは、売春婦自身にそのモノ化の責任があると考えており、彼女が顧客の性的欲望を満たすために自らをオブジェクトとして提供することで、自らの人間性を犠牲にしていると非難している。

カントにとってモノ化が明確に現れるもう一つの関係は愛人関係である。カントによれば、愛人関係とは、男性と複数の女性（愛人）との間で形成される、商業的要素を伴わない性的関係である。この関係は純粋に性的なものであり、関係するすべての当事者が自らの性的欲望の満足を目的としている (Lectures 166)。しかし、この関係に内在する不平等が問題を引き起こす。カントは次のように説明している。

「女性は自らの性を完全に男性に明け渡すが、男性は自らの性を完全には女性に明け渡さない」(Lectures 169)。

カントの立場では、身体と自己は切り離せないものであり、それらが一体となって人間を構成している。したがって、女性が自らの身体（性）を男性パートナーに排他的に明け渡すことは、彼女自身を男性に完全に明け渡し、彼に所有させることを意味する。一方で、複数の性的パートナーを持つ男性は、自らを女性に排他的に明け渡さないため、女性に自らを所有させることはない。カントは、このように女性が男性パートナーに自らを所有させる一方で、男性を同様に所有することができない状況では、最終的に愛人（また、カントの見解では、一夫多妻制の結婚を含む他のポリガミー関係における女性も同様である）は自己を失い、「モノ」にされてしまうと考えている (Lectures 166)。

二人の人間がセックスを行ってもモノ化される恐れがない唯一の関係は、一夫一婦制の結婚であるとカントは考えている。一夫一婦制は、配偶者同士が互いの人格を完全に明け渡し、所有することにおいて平等性と相互性を保証するために必要である。配偶者は互いに排他的に自分自身を明け渡すため、どちらも自己を失い、モノと化す危険にさらされることはない。この完全な平等と相互性について、カントは次のように述べている。

私が自分自身を完全に他者に明け渡し、見返りにその人の人格を得るとき、私は自分自身を取り戻す。他者の所有物として自分を明け渡したが、見返りにその他者を私の所有物として受け取ることで、私は自分を取り戻す。そして、私が他者の所有物となることで得たその人を手に入れることで、私は自己を回復する。このようにして、二人の人格は一つの意志の統一体となる。(Lectures 167)。

さらに、この配偶者同士の人格の相互的な交換は、カントにとって法的に保障されなければならない。カントは結婚を「法に従った性的結合」と定義している (カント 1797, 62)。彼は、結婚における当事者双方の人格の生涯にわたる所有を保証するものとして、外的なもの、すなわち法律を必要とすると主張している。このような法的義務に基づく人格の明け渡しが、一夫一婦制の未婚カップル間関係とは異なる結婚の特徴をなしていると論じている。

2 ポルノグラフィとモノ化

カントと同様に、反ポルノグラフィフェミニストのキャサリン・マッキノンやアンドレア・ドウォーキンも、不平等がモノ化と深く結びついていると考えている。これらのフェミニストとカントの見解では、一方には力を持つモノ化する側がおり、他方にはその無力な被害者が存在する。不平等な力関係のゆえに、前者が後者をモノ化するのである。

カントは一夫多妻制の関係における不平等に注目しているが、マッキノンとドウォーキンは、不平等がはるかに広範かつ普遍的な現象であると考えている。彼女たちの主張によれば、不平等は社会のあらゆる側面に浸透しており、特にジェンダーの不平等が顕著である。マッキノンにとって、ジェンダー（男性であること、女性であること）は生物学的に定義されるセックス（男性、女性）とは明確に区別される。ジェンダーは社会的に構築されたものであり、セックスは生物学的に定義されたものである。マッキノンとドウォーキンは、私たちの父権制社会において、男性と女性は明確に役割が定義されていると強調する。すなわち、女性（すべての女性、女性全体）はモノ化される存在であり、男性（すべての男性、男性全体）はモノ化する存在である (MacKinnon 1987, 6, 32-45, 50; MacKinnon 1989a, 113-4, 128, 137-40; Haslanger 1993, 98-101)。この点についてさらに詳しくは、「性とジェンダーに関するフェミニストの視点」や「権力に関するフェミニストの視点」のエントリーも参照されたい。マッキノンは、個々の女性（セックスとしての女性）がモノ化する側となり、個々の男性（セックスとしての男性）がモノ化される側となる可能性があることを認めている。しかし彼女の見解では、モノ化する側はジェンダーとしての男性であり、モノ化される側はジェンダーとしての女性であると考えられる。つまり、男性（ジェンダー）は定義上モノ化する存在であり、女性（ジェンダー）は定義上モノ化される存在であるとされる。

私たちの社会を悩ませ、女性のモノ化と深く結びついたジェンダー不平等の状況は、マッキノンとドウォーキンによれば、男性によるポルノの消費によって生み出され、維持されているとされる。マッキノンはポルノグラフィを次のように定義している。

ポルノグラフィとは、画像や言葉を通じて女性を性的に露骨に従属させるものであり、そこには女性が性的な対象（オブジェクト）、モノ、あるいは商品として非人間化されることが含まれる。痛み、屈辱、レイプを楽しむ姿、拘束されたり、切り刻まれたり、傷つけられたり、殴られたりする姿、性的な服従や隷属、または陳列の姿勢、身体の一部に還元された姿、モノや動物によって貫通される姿、あるいは屈辱、傷害、拷問の場面で描かれる姿が含まれる。また、不潔であるとか劣った存在として扱われる姿や、血を流し、傷つけられ、痛めつけられた状態が、これらの状況を性的な文脈で表現する形で示される。(MacKinnon 1987, 176)。

このようなポルノの表現は、マッキノンとドウォーキンにとって、ジェンダー不平等を生み出し強化する中心的な要因とされている。ポルノは女性のモノ化を助長し、女性に対する暴力的で従属的な態度を社会的に許容可能なものとして浸透させるとされる。

マッキノンによれば、私たちの社会においてポルノグラフィは、女性の役割を男性による消費のための性的対象（オブジェクト）として定義している。彼女は次のように述べている。「ポルノグラフィは、私たち女性を、いかに性的に使用され得るかという基準で、どのように見られるかによって定義する。……ポルノグラフィは、男性の性的欲望を形成することに参加しており、アクセス可能な性的対象を創り出す。それを所有し、消費することが、社会的に構築された男性性であり、それとして消費され、所有されることが、社会的に

構築された女性性である」(MacKinnon 1987, 173)。マッキノンによれば、ポルノグラフィーは、男性と女性の双方に「女性が男性による消費のために利用可能なモノである」という認識を植え付ける原因となっている。このような社会的影響を通じて、ポルノは女性のモノ化とジェンダー不平等を維持し、再生産する要因として機能しているとされる。

マッキノンとドウォーキンとのモノ化の理解は、カントの見解と類似している。彼女たちにとっても、またカントにとっても、モノ化とは、人間性を備えた存在を単なる道具的価値を持つモノとして扱い、その結果、その人を使用される対象(オブジェクト)の地位に引き下げられることを意味する。モノ化された個人は、他者の性的目的のための道具とされる。したがって、モノ化は人間性に対する深刻な害を構成するものである。

ドウォーキンは、性的モノ化の現象を説明するためにカント的な言語を用いて次のように述べている。

「モノ化とは、人間が社会的手段を通じて非人間化され、モノや商品へと変えられ、売買されることである。モノ化が起こると、個人は非個人化され、個性や完全性は社会的にも、極めて制限されたプライバシーの範囲内でも認められなくなる。モノ化は差別の核心にある損害である。完全に人間であると認められない存在として利用され得る者は、社会的にはもはや完全な人間ではなく、その人間性は縮小されることで傷つけられる」(Dworkin 2000, 30-31)。

ドウォーキンによれば、人が人間以下の存在、他者の使用のための単なるモノとして扱われるとき、その人は人間以下の存在となる。このようにして、その人の人間性は縮小されることで損なわれるのである。

ハンプトンは、ドウォーキンの見解が不穏であり、憂慮すべきものであると述べており、それが父権制を擁護する者たちの見解と実際に非常に似ている点を指摘している。というのも、ドウォーキンによれば、セックスは必然的に女性にとって屈辱的な行為であり、女性の人間性は完全に否定され、文字通り劣化し、人間以下の存在に変えられるとされる。したがって、セックスは女性の人間性を破壊するという結論に至る。ハンプトンは、ドウォーキンが性差別的社会において女性が耐えなければならない社会的な屈辱や劣等性を、彼女たちの真の、そして人としての平等な価値と混同していると説明する。この平等な価値は、どのような不正が加えられたとしても損なわれることはなく、常に認められなければならないものである。その結果として、ハンプトンは、「屈辱」と「価値の縮小」の区別を導入することで、ドウォーキンの分析がより説得力を持つようになると主張している(Hampton 1999, 139-143)。

マッキノンはモノ化について次のように述べている。

性的対象(セックスオブジェクト)とは、その外見に基づき、性的快楽のための使用可能性によって定義される存在である。この定義において、見ること(視線の質、視点を含む)と使用に基づく定義がエロティックにされ、それ自体がセックスの一部となる。これがフェミニストがいう「性的対象」という概念の意味である。(MacKinnon 1987, 173)。

さらに彼女は次のように述べている。

「カント的な見方の一つによれば、人は自由で理性的な主体であり、その存在自体が目的であり、道具的ではない。それに対し、ポルノグラフィーにおいて女性は男性の快楽を目的として存在している」(MacKinnon 1987, 173)。

個人が道具的価値しか持たない限り、その人は明らかに自身を目的として扱われていない。マッキノンの議論によれば、ポルノグラフィーの文脈において女性は男性の快楽のための手段としてのみ存在しており、その人間性が否定されている。

マッキノンとドウォーキン、たとえ女性が男性の性的目的のための単なる手段として使用されることに同意したとしても、それがその使用を正当化する十分な理由にはならないと主張している。たとえば、これらのフェミニストは、ポルノ産業に従事する女性が、自身の同意を示すのは、父権的社会のなかで利用可能な選択肢が欠如しているためだと指摘している。したがって、女性の同意は「真の同意」とは言えない。マッキノンは次のように述べている。

「そのセックスはセックスそのもののために選ばれたものではない。金銭が強制の媒介であり、同意のカバーを提供している」(MacKinnon 1993, 28)。

この議論はポルノグラフィーに関わる女性だけに当てはまるものではない。マッキノンとドウォーキンによれば、ジェンダー不平等の現状のもとでは、男性による性的使用に同意するすべての女性の同意が「真の同意」であるとは言えない。さらに、彼女たちは、女性がモノのように扱われることについて、女性自身が本当に非難されるべきではないと考えている。女性のモノ化は、社会において男性によって要求され、押し付けられるものである。ドウォーキンは、男性は女性をモノとして扱いたいだけでなく、実際にモノのように扱う必要があると主張している (Dworkin 1997, 142–143)。

カントは、モノ化された個人を、使用された後に捨てられるレモンや、人々が空腹を満たすために消費するステーキに例えている (*Lectures* 163, 165)。同様に、マッキノンはポルノグラフィーが消費者に「女性は男性によって使用されるために存在する」と教えていると非難している。マッキノンによれば、女性はカップ（モノ）に例えられ、その外見や使用方法によってのみ価値を持つ存在とされる (MacKinnon 1987, 138)。同様に、ドウォーキンは男性が世界の唯一の「人間の中心」とされており、その周りに使用のための対象としてのモノが存在し、そのなかに女性も含まれると述べている。ドウォーキンによれば、男性は無生物のモノだけでなく、「成人男性ではない人々」をも使用することで、自らの力を実感する (Dworkin 1989, 104)。

カントは、セックスの行使そのものを本質的に問題のあるものとみなしていた。一方で、ドウォーキンとマッキノンにとって問題なのは、セックスそのものではなく、ポルノグラフィーによって構築されたセックスである。これらのフェミニストは、モノ化がジェンダー不平等の結果であり、ポルノグラフィーの存在と消費によって生み出され、維持されていると考えている。マッキノンは、ポルノグラフィーが女性の性的存在を次のように変えてしまうと主張している。「どの男性でも欲しければ購入し、手に持つことができるものにする……彼女は男性にとって使用されるモノ、特に性的に使用される対象（オブジェクト）となる」(MacKinnon 1987, 138)。マッキノンは、使用が簡単に暴力や虐待に続く可能性を懸念している。女性がモノ（人間ではない存在）と見なされることで、男性にとって彼女たちを虐待することに何の問題もないように思えるのだ。女性のモノ的地位は、男性が女性への暴力的行為に問題を感じない原因であると、マッキノンは考えている。

さらに、マッキノンは、ポルノグラフィーにおいて女性が男性に使用され、暴力を受けることを喜んでいるかのように描かれている点を指摘している。

「ポルノグラフィーでは、女性は従属や残酷さを欲しているとされる。男性は、女性が必死に拘束され、殴られ、拷問され、屈辱を受け、殺されることを望んでいる場面を創り出す。または単に連れ去られ、使用されることを望むとされる。女性は暴力を受け、所有されるために存在し、男性は私たちが暴力で支配し、所有する存在である」(MacKinnon 1987, 148)。

同様に、ドウォーキンも次のように述べている。

「男性はレイプや暴力が女性の意思への侵害であるとは信じていない。その一因は、男性が何世紀にも

わたって男性だけの私的な世界でポルノグラフィーを消費してきたからである。……ポルノグラフィーにおける最も持続的な性的真理は、性的暴力が普通の女性によって望まれ、必要とされ、示唆され、または要求されているということである」(Dworkin 1989, 166)。

このように、ポルノグラフィーは消費者に、女性をそのように扱うことが許されるだけでなく、女性自身が男性に使用され、暴力を受け、虐待されることを喜んでいと教えている。さらに、ワトソンは、ポルノグラフィーの使用が、性教育の道具として広く普及していることにより、少年や男性の性的自律を制限すると論じている。ポルノグラフィーの消費は、その利用者の信念、態度、嗜好、欲望に強い影響を与える。ワトソンによれば、ポルノグラフィーはこれらを歪め、このようにして人々の性的自律を損ない、女性と男性の両方における真のセクシュアリティの発達を制約している(Altman and Watson 284, 287-288)。

ポルノグラフィーが男性に女性をモノとして扱い、虐待するよう促すという考えは、多くのフェミニストによって支持されている。アリソン・アシターは、ポルノグラフィーの問題点は、それが男性に女性をモノ(つまり、目的を達成するための単なる手段)として扱う欲望を強化する点にあると論じている(Assiter 1988, 68)。また、レイ・ラングトンも、男性のポルノグラフィー消費と女性のモノ化の間にこのような因果関係が存在する可能性について議論している。彼女は次のように述べている。

「人間の心理において、男性が女性としてポルノ的な人工物を性的に使用するとき、現実の女性をモノとして使用する傾向がある。この因果的主張の弱い変種は、ポルノグラフィーの特定のサブセットに限定されるかもしれない。……人間の心理において、男性が女性としてモノを性的に使用し、そのモノが暴力的または女性蔑視的な内容を持つポルノ的な人工物である場合、彼らは現実の女性をモノとして使用する傾向が強くなる」(Langton 1995, 178)。

このように、ポルノグラフィーが男性の心理や行動に与える影響についての議論は、女性のモノ化という現象を説明する上で重要な視点となっている。

マッキノン、男性のポルノグラフィーの使用と女性のモノ化の関係を単なる因果関係として捉えているわけではない。彼女は次のように有名な主張をしている。

「ポルノグラフィーとは、人間とモノ、人間と紙切れ、現実の男性と非現実の女性との間のセックスである」(MacKinnon 1993, 109)。

そしてその結果、マッキノンにとって「人間(特に女性)はモノになる」(MacKinnon 1993, 25)。つまり、男性がポルノグラフィーを消費する行為そのものが、女性のモノ化を構成しているというのである。この主張は一見すると困惑を招くものだが、ここではこれ以上の掘り下げは行わない。本件に関する詳細な擁護論は、メリнда・ヴァダス(Vadas 2005)やレイ・ラングトン(Langton 1995)によって提示されており、一方でジェニファー・ソール(Saul 2006)による批判も存在する。

カントは、性的モノ化の解決策として結婚を提唱していた。彼は結婚を、配偶者同士が完全な平等と相互性を持つ関係とみなし、それぞれが自らの人格を相手に明け渡し、見返りに相手の人格を受け取る関係と考えた。このようにして、どちらも自分の人格を失うことなく、モノ化を免れると信じていた(カント的結婚についての詳細な議論は、Herman 1993 および Papadaki 2010b を参照されたい)。しかし、ドウォーキンとマッキノンにとって、カントの提案する解決策は不適切である。これらのフェミニストによれば、モノ化は私たちの社会におけるすべての異性愛関係のなかに存在し、女性の人間性を損なっている。結婚やその他の異性愛関係は、彼女たちにとって例外ではない。マッキノンとドウォーキンは、モノ化と闘う方法はジェンダー不平等

と闘うことであると考えている。この不平等は、男性によるポルノグラフィーの消費によって生み出され、維持されている。彼女たちは、ポルノグラフィーがその視聴者（男性や少年）に対して強い影響力と権威を持つとみなしている。この見解はラングトンによっても擁護されており、ポルノグラファーの言説が一般的に高く評価されているかどうかは重要ではないと彼女は主張している。重要なのは、男性や少年がセックスについて主にポルノグラフィーを通じて学んでいるという点である。ポルノグラフィーは、女性が男性による消費にいつでも利用可能なモノであるというメッセージを視聴者に伝えている (Langton 1993, 312)。

ポルノグラフィーが男性にこれほどの影響を与え、女性のモノ化に中心的な役割を果たしているという見解には批判が寄せられている。デボラ・キャメロンとエリザベス・フレイザーは、ポルノグラフィーの消費が男性を特定の行動に駆り立てるという考えに疑問を投げかけている。彼女たちによれば、この見解の問題点は、男性がポルノ的な素材を批判的に解釈する能力がないかのように描かれ、単純にポルノで見たことを模倣する存在として提示される点にある (Cameron & Frazer 2000, 248-251)。

同様の観点から、アルトマンは、ポルノグラフィーの消費が人の嗜好や欲望（性的なものもそれ以外のものも）を変えることはないと主張している。彼は、男性が女性の従属を性的に興奮させるものと見なすのは、ポルノを消費した結果ではないと述べている。むしろ、男性はすでに女性の従属に興奮を感じさせるものとして認識しているため、そのような内容を含むポルノグラフィーを楽しむのだという。つまり、ポルノグラフィーが何かを「性的に魅力的なもの」にするのではなく、それは消費者がすでに魅力的と感じているものを取り扱っているにすぎない (Altman and Watson, 68-69)。

ポルノグラフィーがその消費者に「女性はモノのような存在である」というメッセージを伝えているとしても、それがジェンダー不平等や女性のモノ化を支える上で特別な役割を果たしているわけではない、という指摘もある。レスリー・グリーンは、女性が単なるモノや道具であるという考えは、親からの圧力、テレビ、人気小説、ミュージックビデオ、ファッションなどを通じて強化されていると説明している。グリーンは、女性の主体性が認められるような形で社会を変えることが必要だと述べている (Green 2000, 43-52)。また、ヌスバウムも、ポルノグラフィーを女性のモノ化の主要な原因と見なすべきではないと主張している。彼女によれば、性的モノ化はしばしば社会的不平等によって引き起こされるが、ポルノグラフィーがその不平等の核心であると信じる理由はないという (Nussbaum 1995, 286, 290)。

ロナルド・ドウォーキンもこれに類似した見解を示しており、次のように述べている。

「フェミニストたちがその運動 [ポルノグラフィーの禁止運動] にこれほど多くのエネルギーを注いできたことは、奇妙かもしれない。……大衆文化が性的平等への障害であることは間違いないが、その文化の最も人気のある形態——たとえば、女性が描かれるソープオペラやコマーシャル——は、少数派が見る汚れた映画よりもはるかに大きな障害である」 (R. Dworkin 1993, 36)。

このように、ポルノグラフィーの影響を特別視することには批判があり、ジェンダー不平等における他の要因にも目を向けるべきだとする意見も存在する。このテーマについてさらに詳しい議論は、「性市場に関するフェミニストの視点」および「ポルノグラフィーと検閲に関する議論」の項目を参照されたい。

3 女らしい見掛けとモノ化

一部のフェミニスト思想家は、私たちの社会において女性が男性よりも身体と結びつけられ、身体によって同一視されやすいと指摘している。また、男性よりも外見の美しさで評価される度合いが高いという (Bartky 1990; Bordo 1993, 143)。社会的受容を得るために、女性は身体や外見全般を時代ごとの「女性的外見の規範」

(女性が達成すべきだと感じる外見の基準)に合わせるように絶え間なく修正するプレッシャーにさらされている (Saul 2003, 144)。さらに、一部のフェミニストは、外見にとられることで女性自身が自分自身を装飾され、見られるためのモノとして扱っていると主張している。この自己対象化は、社会的規範とその圧力の結果であり、女性の主体性や自律性に影響を与えるものとして議論されている。

サンドラ・バートキーは著書 *Femininity and Domination* の中で、マルクスの疎外理論を用いて、女性が外見にとられることによって生じるモノ化を説明している。マルクスの疎外理論の特徴の一つは、人間の人格の断片化、つまり「人間の本性がいくつかの歪んだ部分に分裂すること」である。マルクスによれば、労働は最も特有な人間の活動であり、労働の成果は労働者の存在の外化である。しかし、資本主義のもとでは、労働者は労働の成果から疎外され、その結果として人格が断片化される (Bartky 1990, 128-129)。バートキーはこの理論を応用し、女性が自らの外見に過剰に関与することが、同様の疎外と断片化をもたらすと主張している。外見の管理と「女性らしさ」の基準への適応が、女性の主体性を損ない、自分自身を外見という「商品」のように扱わせるという視点を提供している。

バートキーは、次のように父権制社会における女性もまた一種の断片化を経験していると考えている。

「[自分の身体]と密接に結び付けられることによって……[彼女の]存在全体が身体と同一視されるが、身体は……心や人格ほど本質的に人間的であるとは見なされていない」ことによるものである (Bartky 1990, 130)。

女性の身体に過度の焦点が当てられるため、心や人格は十分に認識されない。結果として、女性の人格は断片化される。バートキーは、この断片化を通じて女性がモノ化されると主張している。すなわち、女性の身体が彼女の人格から分離され、女性を表象するものとして考えられるようになることが、モノ化を引き起こすという (Bartky 1990, 130)。

バートキーは、通常、モノ化はモノ化する側とモノ化される側という二者間で起こると説明している (これはカントやマッキノン、ドウォーキンによって提唱されたモノ化の概念と一致する)。しかし、バートキーが指摘するように、モノ化する者とモノ化される者が同一人物である場合もあり得る。父権制社会の女性は、常に男性に見られていると感じており (ベンサムが提案したモデル刑務所「パノプティコン」の囚人に似ている)、男性にとって官能的に魅力的でなければならないというプレッシャーを感じている (Bartky 1990, 65)。バートキーは次のように述べている。

制度化された異性愛の体制のもとで、女性は男性に対して「モノ^{オブジェクト}」であり「獲物」とならなければならない。……女性は、自分の身体を他者、匿名の父権的な他者によって見られるものとして生きている。(Bartky 1990, 73)。

この状況は、女性が自らの人格をモノ化する結果を招く。バートキーは、女性が「自らに対して男性の態度を取るようになる」と主張している。その結果、彼女は自分の身体に対してエロティックな満足を感じ、「美しい対象として見られ装飾される自分の身体に歓喜する」ようになる。このような態度は「ナルシズム」と呼ばれ、バートキーによれば、「自らの身体存在への陶醉」と定義される (Bartky 1990, 131-132)。

バートキーは、女性が自分の身体存在に陶醉することで、自分自身を「見られるため」「装飾されるため」の対象 (オブジェクト) として見なし扱うことを学ぶと論じている。つまり、女性は自分自身を外部から見るように学ぶのである。このようなナルシズムについて、シモーヌ・ド・ボーヴォワールも次のように指摘している。「ナルシズムとは、自我を二重化し、それを『異邦人』として設定することにある」 (Beauvoir 1961, 375)。思春期の少女は「対象となり、自分自身を対象として見るようになる。彼女はその存在の新しい側面を

驚きとともに発見する。それは、自分が二重化されたように感じられる。彼女は自分自身と完全に一致するのではなく、外部に存在し始めるのである」(Beauvoir 1961, 316)。しかし、この女性の意識内に宿る「異邦人」について、バートキーはそれが実際にはほとんど「異邦人」ではないと述べている。それはむしろ、女性自身の自己そのものであると指摘している (Bartky 1993, 134)。

ナンシー・パウアーは、ボーヴォワールの思想に基づき、女性が自己をモノ化する誘惑に屈する理由を常に持つだろうと述べている。パウアーは、最近広がりを見せている現象として、女性大学生が男性学生に一方的にオーラルセックスを行うことに快楽を見いだしていると主張する事例を挙げている。このようにして自分自身を「少年の抑えきれない欲望の対象」とする女性は、権力感と快楽を経験するが、パウアーによれば、その快楽は純粋なものではない (Bauer 2011, 124)。

『第二の性』の大きなテーマの一つは、パウアーの結論によれば、女性が完全な人格を達成するためには、男性が女性をモノ化するのをやめるだけでなく、「女性自身も自己をモノ化する誘惑を退けることを気にかける必要がある」という点である (Bauer 2011, 128)。

バートキーは、女性の身体を「女性らしい身体」に作り上げる規律的实践について論じており、これらの実践を通じて女性は自分自身を対象(オブジェクト)として見ることを学ぶと述べている。まず、彼女が挙げるのは、特定のサイズや形状の身体を作り上げることを目的とした実践である。つまり、女性は時代の身体的理想(たとえば、スリムな体型や大きな胸)に従うことを求められる。バートキーによれば、これは女性が「スリムであることの専制」に服従し、絶え間ないダイエットや運動を強いられることを意味する (Bartky 1990, 65-67)。スーザン・ボルドーもまた、女性が男性よりもダイエットに執着する傾向を強調している。この執着は、拒食症や過食症といった深刻な疾患と結びついている。ボルドーは、すべての拒食症患者の90%が女性であると指摘している (Bordo 1993, 143, 154)。さらに、多くの女性が自分の身体を理想とされる身体に近づけるために、美容整形手術を受けている。最も一般的な手術は脂肪吸引と豊胸手術である。これらの実践は、女性が身体的理想に適応するための努力として広く行われている。

バートキーによれば、女性の身体を「女性らしい身体」に作り上げる規律的实践の第二のカテゴリーは、身体の動作、姿勢、移動を制御することを目的としたものである。彼女は、女性の動きは男性よりも制限されており、男性が利用可能な空間を広く取る傾向があるのに対して、女性はできるだけ少ない空間を占めようとする」と述べている。さらに、女性の動きは不快な服や靴によっても抑制されている (Bartky 1990, 68-69)。最後に、バートキーが挙げる第三のカテゴリーは、女性の身体を「装飾された表面」として展示することを目的とした実践である。女性は肌を柔らかく滑らかで無毛かつシワのない状態に保つことを求められ、肌の欠点を隠すために化粧を施さなければならない。私たちの文化は、女性の身体や顔に「幼児化」を要求しているとバートキーは指摘している (Bartky 1990, 71-72)。

バートキーは次のように述べている。「女性がどのような存在になろうとも、重要なのは、彼女が他者を喜ばせたり興奮させたりするためにデザインされた身体であるという点である」(Bartky 1990, 80)。さらに、アイリス・マリオン・ヤングは、女性が外見にとられることが女性の身体的潜在能力を抑圧すると指摘している。

「私たちの身体を見られ装飾される美しい対象として認識する感覚を育むことは、私たちの身体を強く活動的な主体として認識する感覚を抑圧することを必要とする」(Young, 1979)。

これらの指摘は、女性の外見への関与が、身体的および主体的な自己実現を妨げる要因となることを強調している。

バートキーによれば、女性の現状について責任を問われるべき主体は特定しづらい。彼女は次のように述べ

ている。

「女性の身体に女性らしさを刻み込む規律的な権力は、どこにでもあり、そしてどこにもない。その規律者はすべての人でありながら、特定の誰でもない」(Bartky 1990, 74)。

「女性はもっと女性らしく見えるべきだ」というメッセージは、あらゆるところで見られる。それは親や教師、男性パートナーによって強化され、メディア全般を通じてさまざまな形で表現されている。このため、女性の状況に対する責任は男性だけに帰することはできない。パートキーの考えでは、このような女性らしさを刻み込む規律的権力の遍在性により、女性が外見に絶えず気を配ることは、自然なことであり、しかも自発的な行為と見なされるようになった。女性たちはこの規律を内面化しているため、自分たちをモノ化する状況から解放されることは非常に困難であるとパートキーは考えている。

しかし、すべてのフェミニストが、女性の外見に関する追求に伴うモノ化の不可避性を懸念しているわけではない。ジャネット・リチャーズは、女性が外見に執着することを個人的な嗜好の問題であり、フェミニズムに関する問題ではないと捉えている。彼女は、女性が官能的に魅力的であろうとすることには、本質的に屈辱的でもモノ化的でもないことを主張している (Richards 1980, 184-204)。ナターシャ・ウォルターもまた、女性の外見への執着が必ずしもモノ化に結びつくわけではないと考えている。彼女はさらに、現代社会において男性もまた自己装飾を行い、女性からの賞賛を求めている事実を指摘している (Walter 1998, 86-102)。

ボルドーは、男性が外見により多くの時間、金銭、努力を費やすようになっている事実を認めている (Bordo 1999)。彼女は、現在の男性向け雑誌が女性向け雑誌と同様に、男性がどのように見えるべきかについての記事やアドバイスであふれていることを強調している。たとえば、より筋肉質になる方法、着るべき服、使用すべきクリームやその他の化粧品などである。男性もまた、支配的な男性性の理想に外見を適合させる必要性を感じている。ボルドーは、男性が外見への関心を高める背景には消費資本主義があると考えている。彼女は次のように問いかける。

「もし化粧品、ダイエット、エクササイズ、手術産業が、男性にも自分の外見を常に改善する必要があると納得させることができるなら、なぜ女性市場に限定されるべきなのか？」(Bordo 1999, 220)。

ボルドーは、消費資本主義が女性だけでなく男性も外見に執着させる要因として機能していると指摘している。

男性もまた、特定の外見基準に従うプレッシャーを受け、外見を改善するための絶え間ない努力をしているという事実は、それ自体では、女性（および男性）の外見への執着がモノ化を伴わないことを示すには不十分である。ソールは次のように述べている。

「男性に対する達成不可能な美の基準に従うプレッシャーの増加は、進歩の兆しからは程遠い。それはむしろ、この問題が拡大していることの証拠である」(Saul 2003, 168)。

つまり、男性が女性と同様の外見的プレッシャーを経験するようになったことは、ジェンダー間の平等を示すものではなく、むしろ外見の理想をめぐる問題がより広範に浸透し、深刻化していることを意味している。

4 客観性とモノ化

マッキノン、客観性とモノ化の間には重要な関係があるという考えを提唱している。彼女は次のように述べている。

『知る者』の立場とは……中立的な姿勢、ここでは客観性と呼ぶもの、すなわち非位置的で距離を置いた視点である……[これは]社会的には男性の視点である……世界を認識する際の視点としての客観性と、そのように把握された世界との関係は、モノ化の関係である。客観性は、モノ化という社会的プロセスを反映する認識論的な姿勢であり、それを行動として具現化するのが男性支配という政治的・社会的実践である。つまり、世界を客観的に見ることは、それをモノ化することを意味する」(MacKinnon 1987, 50)。

この主張は近年のフェミニストによる研究の焦点となっている。マッキノンの理論を基に、レイ・ラングトンやサリー・ハスランガーは、モノ化がしばしば隠され、「客観性」として覆い隠されているという考えを探求している。マッキノンの主張は、認識論と社会的権力構造の関係を批判的に再考する上で重要な視点を提供している。彼女の論点は、客観性が中立的な視点として想定される場合でも、それがどのようにして支配とモノ化を再生産するかを明らかにすることを目指している。

ハスランガーによれば、私たちが世界について客観的になろうとし、その中で機能しようとする際には、物事の本質を発見しようとする。ある対象の本質はその存在にとって不可欠なものであり、その本質が変化すれば対象は必然的に破壊される。対象は、それを構成する本質的な性質なしには存在できない。本質を発見することで、通常の下でその対象がどのように振る舞うかを説明することが可能となる。このことは、実践的な意思決定において、対象の本質に注意を払う必要があることを意味している (Haslanger 1993, 103, 105)。ハスランガーは次のように述べている。

「紙皿で卵を焼こうとしても無駄であるし、岩に読み方を教えようとしても意味はない。世界は私たちの欲望や必要に無限に対応可能なわけではないため、合理的な意思決定は『物事がどのようなものであるか』に適応する。ここで言う『物事がどのようなものであるか』とは、対象の本質や私たちの行動を制約する背景条件に適応することを意味する」(Haslanger 1993, 105)。

ハスランガーの議論は、合理的な意思決定が世界の性質や制約を理解し、それに基づいて行動する必要があることを強調している。この視点は、対象の本質と私たちの行動との関係を深く考察するための基盤を提供している。

ある対象の本質を発見するためのもっともらしい戦略は、観察される規則性を探ることである。これは、本質が通常の下で対象の規則的な振る舞いをもたらすからである。たとえば、自分のシダ植物が水を与えられないと枯れることを観察した場合、その本質として「水なしでは生存できない」という性質を持つと信じるようになる。そして、この観察された規則性に基づいて意思決定を調整し、シダ植物が枯れないように水を与えるようになる。このように、水を与えなければ枯れるという規則性を観察することで、それがシダ植物の本質によるものだと結論づける。ハスランガーは、このように観察された規則性をもとにして実践的な意思決定に制約を設定する手続きについて、次のように述べている。「これは『中立的』であり、『客観的』または『合理的』な手続きの典型のように思われる」(Haslanger 1993, 105)。このアプローチは、観察された事実に基づいて合理的な判断を行う手法を示しており、対象の性質とその規則的な振る舞いを理解するための方法論的枠組みを提供している。

しかし、この手続きは問題を引き起こす可能性がある。特に、社会的な現象に適用した場合にその問題が顕著になる。たとえば、上記の手続きに従って、父権制社会 (マッキノンによれば、私たちの社会もその一例) において女性の「本質」を発見しようとすることは非常に問題がある。

マッキノンは、私たちの社会において、女性が従順でモノのようであること (そして男性が女性をモノ化する

る側であること)が観察される規則性であると考えている。このような観察に基づけば、女性は本質的に従順でモノのようであるという信念が導き出されるかもしれない。ここで注目すべきは、マッキノン、ハスランガー、ラングトンが彼女の議論を引き継ぐ形で用いている「男性」と「女性」という用語が、生物学的ではなく社会的に定義されたジェンダーカテゴリーを指している点である。一人が「男性」または「女性」とされるのは、その人の社会的地位による(詳細は「性とジェンダーに関するフェミニストの視点」の項を参照)。しかし、女性が本質的に従順でモノのようであるという信念は誤りである。なぜなら、女性はそのように「作られた」のであり、それが自然な本質ではないからである。この誤った信念が広がることで、ジェンダー不平等が正当化され、社会的な抑圧が強化される危険性がある。

女性がモノのような地位にあることは自然な事実ではなく、ジェンダー不平等の結果である。この「女性に関する自然な事実」とされるものに世界を適応させることで、私たちは既存のジェンダー不平等の状況を維持している。マッキノンはこれを鮮やかに次のように表現している。「[私たちが] そのように作られたジェンダーの現実を中立的に見るならば、既に行われた害は害として認識されない。それは単に『物事がそうであるように見えるだけ』の状態になる」(MacKinnon 1987, 59)。ハスランガーはこれに加えて次のように述べている。「一度、女性を『本質的に』従順で敬意を払う存在と見なししまうと、この役割を変えようとする努力は動機づけを失い、さらには無意味に見えるようになる。……これらの考察は、一見『中立的』または『客観的』な理想、つまり観察された規則性に基づいて実践的意思決定に制約を課す手続きが、ジェンダー階層の条件下では、その階層が依存する社会的配置を強化するものであることを示唆している」(Haslanger 1993, 106)。このように、観察された規則性に基づいて意思決定を行う手続きは、一見すると客観的で中立的に思われるが、ジェンダー不平等という文脈ではその不平等を再生産する役割を果たす。このため、女性の従順性やモノ化を「自然なもの」として扱うことは、問題解決を阻む構造的障壁となる。

ハスランガーは、マッキノンの議論を基にして、AがBをモノ化するために必要な4つの条件を次のように提案している。

- AはBを、Aの欲望を満たすための対象(オブジェクト)として見なし、扱う。
- AがBに特定の性質を持ってほしいと望む場合、AはBにその性質を強制する。
- AはBがその性質を持っていると信じる。
- AはBがその性質を本質的に持っていると信じる(Haslanger 1993, 102-103)。

When it comes to women's sexual objectification by men, the above conditions go as following:

女性が男性によって性的にモノ化される場合、上記の条件は次のように当てはまる。

- 男性が女性を自分の欲望を満たすための対象(オブジェクト)として見なし、扱う。女性は、男性の性的欲望を満たすための手段として認識される。
- 男性が女性に特定の性質を持ってほしいと望む場合、男性は女性にその性質を強制する。たとえば、女性が従順であることや性的魅力を持つことが求められ、それが押し付けられる。
- 男性は女性がその性質を持っていると信じる。男性は、女性が従順であるとか、性的魅力があるという性質を持っていると確信する。
- 男性は女性がその性質を本質的に持っていると信じる。これらの性質は、女性の本質的な特徴であり、自然なものであると考えられる(Haslanger 1993, 102-103)。

ハスランガーによれば、モノ化する者が自らの権力を「隠蔽」し、男性と女性の間で観察される差異が彼らの本質の結果であると信じるためには、「非視点性」の規範に頼る必要がある。つまり、彼は自らの観察が自

分の社会的地位によって条件づけられておらず、観察対象の状況に影響を与えていないと信じなければならない。ハスランガーは、モノ化する者がしばしば用いる「想定された客観性の規範」について議論しており、それは以下の4つのサブ規範から成り立っている。

1. 観察の中立性の想定自分の観察が偏りや先入観の影響を受けていないと信じる。
2. 観察者の透明性の想定自分が観察の過程に影響を与える存在ではなく、透明な立場にあると信じる。
3. 観察される対象の本質性の想定観察された特性や差異は対象の本質的な性質であり、社会的な要因の影響を受けていないと信じる。
4. 観察結果の普遍性の想定自分の観察結果が普遍的な真理を反映しており、特定の社会的・文化的文脈に限定されないと信じる。

ハスランガーは、社会的階層が存在する条件下では、「想定された客観性の規範」が女性のモノ化の既存パターンを永續させると主張している。その結果、社会変革への努力は動機を失うことになる。この規範は、女性にとって悪い実践的結果をもたらしながら男性の利益に寄与するため（実践的に悪いという理由で）、拒否されるべきである。

さらにハスランガーは、「想定された客観性の規範」は女性が従順でモノのような存在であることが本質的な性質であるといった誤った信念を生み出すため（認識論的に悪いという理由で）、拒否されるべきであると論じている (Haslanger 1993, 108–115)。

ラングトンは、ハスランガーと同様に、社会的階層が存在する条件下では「想定された客観性の規範」が問題であり、したがって拒否されるべきだと主張している。その理由は2つある。

誤った信念を生み出すため。ハスランガーも指摘したように、この規範は世界と全く合致しない誤った信念、たとえば「女性が本質的にモノのような存在である」という信念を生み出す。

正しいが正当化されていない信念を生み出すため。ラングトンによれば、この規範は「正しいが間違っただ理由による」信念を生み出す。たとえば、

「女性が実際に従順でモノのようである」という信念がそれに該当する。この信念が正当化されない理由は、その「適合の方向性」にあるとラングトンは説明している。この場合、男性が自分の信念を世界に適合させるのではなく、世界が男性の信念に適合するように変えられている。つまり、権力のある人々が「想定された客観性の規範」を追求することで、世界が彼らの信念に一致する形に作り変えられるのである (Langton 1993, 383)。

ラングトンは、客観性とは心が世界に適合する方法（私たちの信念が世界に合うように整えられる方法）に関するものであると説明している。客観的である人は、信念が正しい方向で適合している。つまり、その信念は世界のあり方に適合するように整理されている。一方で、モノ化は、世界が心に適合する方法（世界が私たちの信念に従って形作られる方法）に関するものである。モノ化する者の信念は誤った方向で適合している。つまり、モノ化する者は、自分の信念を世界に適合させるのではなく、欲望に影響された信念に世界を適合させるように世界を整えている。したがって、モノ化とは、社会的世界が欲望と信念によって形作られるプロセスである。モノ化する者は、自分の信念が世界に適合していると考えますが、実際には世界が彼または彼女の信念に適合するように変えられているのである。

女性のモノ化に関して、ラングトンは次のように説明している。女性が従順でモノのようになるのは、男性の欲望と信念によるものである。男性は女性がそのような状態であることを望み、もし彼らが権力を持っていれば、女性をそのような状態に強制的に変える。「想定された客観性の規範」に従って、男性は女性が実際に従順で

モノのようであるという信念を形成し、さらに女性がそのようであるのは彼女たちの本質によるものだと信じる。このように、女性のモノ化においては、世界が男性の心に適合するように変えられている。しかし、男性の信念は誤った適合の方向性を持っている。なぜなら、男性は自分の信念と欲望（女性が従順でモノのようであるという信念）に世界を適合させているからである。

「想定された客観性の規範」は、女性が従順でモノのようであるという信念を生み出す。この信念は一見すると真実だが、誤った適合の方向性を持っている (Langton 2000, 138-142)。さらに、この規範は女性が本質的にそのようであるという誤った信念も生み出す。

(異常な適合の方向性を持つ信念や、それを生み出す仕組みに関するさらなる議論については、ラングトンの2004年の論文「Projection and Objectification」における「投影」とその女性のモノ化における役割の議論を参照されたい。また、「想定された客観性の規範」が誤った適合の方向性を持つ信念を生む原因であるというラングトンの議論に対する批判については、Papadaki 2008を参照されたい。)

5 ポジティブなモノ化の可能性

これまで、モノ化に関わる不当性についてのさまざまな懸念を検討してきた。しかし、多くの思想家が、モノ化が常に道徳的に問題であるという考えに異議を唱えている。

アラン・ソーブルは、人間の尊厳は人が「持つ」ものであるという広く支持されているカント的な見解に疑問を呈している。彼は、モノ化は不適切ではないと主張し、人はすでに「モノ」でしかなく、モノであることが必ずしも悪いことではないと述べている。この意味では、誰もモノ化されることはできない。なぜなら、モノ化によって引き下げられるべき「高次の存在論的地位」を持つ者は存在しないからである。一方で、すべての人がモノ化に対して脆弱であり、モノ化される可能性と許容性を持っている。なぜなら、モノ化とは、人をその正しい存在論的水準に位置づけることだからである。彼は次のように述べている。

「人を『人格』として扱い、非人間化してはならない」という主張は、人間を実際以上に高めて実体化し、擬人化することである。「人をモノとして扱うな」と言われるが、なぜそうしてはいけないのか？ 答えとして、「人は人格としてモノとして扱われないに値する」とされる。なんと見事な幻想的なショービニズムだろう。人間は、私たちが彼らをそう見なすように仕向けたいと思うほど、またはそうであってほしいと願うほど壮大な存在ではないのだ。(Soble 2002b, 53-54)

ポルノグラフィーに関して、ソーブルによれば、ポルノ俳優やモデルを性的快楽のための対象(オブジェクト)として扱い、その人間性を否定することには何の問題もない。それは、道徳的に考慮すべき否定的なモノ化が存在しないからである。さらにソーブルは、ポルノグラフィーの役割はむしろ良いものであると主張している。彼によれば、ポルノグラフィーは、セックスが得意なこれらの人々(男女ともに)に、人生で何かを成し遂げる機会を提供する(Soble 2002b)。

レスリー・グリーンもまた、人を対象(オブジェクト)として扱うことが許容されるだけでなく、必要であると主張する思想家の一人である。グリーンによれば、人は身体を持ち、空間に広がり、時間の中に存在し、自然法則に従う存在である。しかし、人は明らかにモノ以上の存在である。したがって、グリーンが問題視するのは、人を単なるモノとして、つまり自分の目的を達成するための手段としてのみ扱うことである。他者を手段として扱う場合でも、同時にその人が持つ目的を尊重し、主体としての完全性を認める必要がある(Green 2000, 44)。

グリーンは、カントの定言命法を引き合いに出し、そこでは「人を単なる手段として扱う」ことが禁止されているのであり、「同時に目的として扱う」ことが要求されていると指摘する。グリーンが強調するように、「人を手段として扱う」こと自体は禁止されていない (Green 2000, 44)。

実際、グリーンは次のように述べている。

「私たちは他者を道具として扱わなければならない。なぜなら、私たちは彼らの技術、付き合い、そして身体を必要としているからだ。実際、社会的な生き物である私たちが一人で行えることはほとんどなく、それだけでは充足も得られない」 (Green 2000, 45-46)。

グリーンによれば、高齢者、重度の障害者、慢性的な失業者が最も恐れるのは、自分が他者にとってもはや役に立たなくなることである。グリーンは次のように述べている。

「彼らは、自らの主体性が減少したことだけでなく、客体性が減少したことも嘆く。……彼らは……主観化される」 (Green 2000, 46)。

マーサ・ヌスバウムもまた、モノ化が人間性への敬意と矛盾するという広く支持されている考えに異議を唱えることを目指している。彼女は、モノ化という概念を体系的に分析している。この概念は決して容易に定義できるものではなく、このテーマに関する著者たちが十分に明確化していないことを彼女自身も認めている (Nussbaum 1995, 251)。

ヌスバウムにとって、モノ化とは、人をモノとして見たり、モノとして扱ったりすることである。それは、本来モノではなく人間であるものをモノとして扱うことであり、一つのものを別のものとして扱うことを含む (Nussbaum 1995, 256-257)。したがって、ヌスバウムは「人間は部分的にモノである」というグリーンの見解に同意しない。ヌスバウムによれば、モノ化には以下の7つの特徴が関係している。これら7つの特徴の詳細な説明は、このエントリーの序論で提供されている。

ヌスバウムによれば、ある人がモノ化されるのは、上記の7つの方法のいずれかで見られたり扱われたりするときである。ヌスバウムは、カント、マッキノン、ドウォーキン、さらにはグリーンらのモノ化の概念における核心的な要素である道具性 (Instrumentality) が、人をモノとして扱う方法の一つにすぎないと指摘している (Nussbaum 1995, 265)。ただしヌスバウムは、これらの7つの要素の中でも道具性が特に問題であり、他のモノ化の形式と密接に関連している場合が多いと認めている。このように、ヌスバウムのモノ化の概念は、カントやマッキノン、ドウォーキンの概念よりも広範である。ヌスバウムにとってのモノ化は、単に道具化によって定義されるのではなく、また、人がモノとして「扱われる」のではなく、「見られる」場合 (彼女が挙げた7つの方法のいずれかで) にも起こり得るからである。

ヌスバウムによれば、モノ化は必ずしも人間性に壊滅的な結果をもたらすわけではない。実際、ヌスバウムは、モノ化を必然的に否定的な現象と見なしているマッキノンやドウォーキンを批判している (Nussbaum 1995, 273)。ヌスバウムは次のように述べている。

「モノ化のいくつかの特徴は……ある状況において……性的生活の素晴らしい特徴となり得る場合もある」。したがって、「モノ化という言葉は……より肯定的な精神で使うこともできる」。これを理解するには、「(ある形態の) モノ化と平等、尊重、そして同意の間にあるとされる不可能な組み合わせが、実際には可能であるかもしれないと考える必要がある」 (Nussbaum 1995, 251)。

ヌスバウムは、モノ化が特定の条件下で肯定的な役割を果たし得ると論じており、その条件を探ることで、より複雑で包括的な視点を提供している。

ヌスバウムによれば、「モノ化において、文脈がすべてである。……多くの場合、すべてではないにしても、モノ化が問題である場合と無害である場合の違いは、人間関係の全体的な文脈によって決まる」(Nussbaum 1995, 271)。「モノ化には特徴があり、それが良いものか悪いものかは、全体的な文脈次第である」(Nussbaum 1995, 251)。モノ化が否定的になるのは、平等、尊重、同意が欠けた文脈で発生する場合である。ヌスバウムが否定的なモノ化の例として挙げているのは、ハンキンソンの『イザベルとヴェロニク』、雑誌『プレイボーイ』、そしてジェイムズの『黄金の盃』である。一方で、モノ化が肯定的または無害であるのは、それが平等、尊重、同意と両立する場合である。彼女は無害なモノ化の例として次のように述べている。

「もし私が恋人とベッドで横たわっていて、彼のお腹を枕として使うとしたら、これは全く有害ではないように思える。彼の同意を得ている（あるいは、彼が眠っていても気にしないだろうという合理的な信念がある）場合で、彼に痛みを与えることなく、また彼が一般的に『枕以上』の存在として扱われている関係の文脈において行われているならば、問題はない」(Nussbaum 1995, 265)。

このように、ヌスバウムはモノ化の道徳的評価を文脈に依存させるべきだと主張している。

ヌスバウムは、D.H. ローレンスの小説における「ローレンス的モノ化」(Lawrentian objectification) を、肯定的なモノ化の明確な例と考えている。彼女が論文で引用している『チャタレイ夫人の恋人』の一節には、恋人同士のセックスシーンが描かれている。この場面では、コンニーとメラーズが、粗い社会的平等と尊重の文脈の中でお互いを身体の一部に同一視している。彼らは「…個性を脇に置き、身体の器官と同一化される。彼らはお互いをこれらの器官に基づいて見ている」(Nussbaum 1995, 275)。その結果、セックス行為において、二人の恋人はお互いの自律性や主観性を否定する形になる。しかし、これは尊重と平等が基盤にあるため、ヌスバウムによれば肯定的なモノ化の一例であると考えられる。

しかし、ヌスバウムは次のように説明している。

「セックスにおける自律性の喪失は、全体的に見て自律性が尊重され、促進される文脈の中で起こるものである。……また、愛の営みの瞬間に主観性が失われたとしても、それはしばしば、他の瞬間におけるパートナーの主観性への強い関心を伴う」(Nussbaum 1995, 274-276)。

さらに、ヌスバウムはモノ化に関する最新のエッセイでも強調している。

「人が自律的な自己決定を自ら放棄すること、あるいは意図的な受動性は、女性が自らのために目的として扱われ、完全な人間として扱われる関係と両立し得るし、むしろその関係の価値ある一部でさえあり得る」(Nussbaum 2007, 51)。

さらに、ヌスバウムによれば、コンニーとメラーズはお互いを単なる目的のための手段として扱っているわけではない。たとえ彼らが性的快樂のための道具として互いを扱うとしても、一般的にはお互いをそれ以上の存在として見なしている。したがって、この二人の恋人は平等であり、互いを人間として尊重する形で対象(オブジェクト)として扱っているのである。

ヌスバウムが提示したモノ化に関わる7つの特徴とそれらの間に存在する関係は、これまでで最も体系的なモノ化の概念分析であるといえる。しかし、パパダキはヌスバウムの概念が広すぎると批判している(Papadaki 2010a)。ヌスバウムによれば、人がモノ化されるのは、7つの特徴のいずれか一つ以上において、モノとして見られたり扱われたりする場合である。もし、誰かが他者によって、たとえば何らかの目的のための手段(単なる手段ではないとしても)として扱われたり見られたりするたびに、その人がモノ化されるとするならば、私たちは日常生活の中でほぼ誰もがモノ化されていることになる。たとえば、タクシー運転手を目

的地に行くための手段として利用したり、自分自身を食事を準備する手段として利用することなどが挙げられる。このように、私たちは常に他者や自分を道具的に利用している。パパダキは、モノ化を有意義な概念にするためには、その範囲を制限する必要があると主張している。ハルワニもまた、モノ化の概念を狭義に定義することを支持している。彼は、モノ化の定義として「他者に対する行動や扱いのみを含むもの」を提案している。この見解では、単に他者を性的に見ることや考えることはモノ化には該当しない。ハルワニは次のように述べている。

「この定義はより簡潔であり、モノ化の問題点、すなわちモノ化された人（しばしば被害者と見なされる）への影響をより正確に反映している」(Halwani 2008, 342; Halwani 2010, 187-188)。

彼は、ヌスバウムが提示する肯定的なモノ化の事例では、そもそもモノ化は起きていないと主張する方が理にかなっていると考えている。それは、「モノ化が存在するが、それは許容できる、または良いものだと示そうとする認識的な曲芸に取り組むよりも良い」(Halwani 2010, 197)。ヌスバウム自身も、彼女のモノ化のカテゴリーが包括的すぎる可能性を懸念しているようである。たとえば、彼女は、リストの7つの概念のいずれか一つだけが存在する場合、それをモノ化とみなすべきかどうかについては必ずしも十分ではないと述べている(Nussbaum 1995, 258)。しかし、パパダキは、ヌスバウムが具体的にどのようにしてモノ化が存在するかを判断すべきかについて十分な指針を与えていないと指摘している。さらに、モノ化と道徳的問題性との関連が弱まると、(否定的な)モノ化に対する闘いが損なわれるリスクがあると警告している(Papadaki 2010a, 27-31)。

6 モノ化の特徴や基準を特定することの無益さ

最近、ナンシー・バウアーは、性的モノ化が何であるかについて一連の基準を定める可能性に対して懐疑的な見解を表明している。彼女は、私たちが共有する世界観において規範的な役割を果たす用語の特徴や基準を特定することは困難だと主張している。また、その用語が私の世界観には重要であっても、あなたの世界観には重要でない場合、バウアーによれば、その用語の適用基準を私が特定しても、あなたの視点からその現象を指摘することは不可能である。彼女は次のように述べている。

もし「性的モノ化」という用語が、あなたが自分の見る世界を理解するのに重要な役割を果たしているなら、おおむね、あなたはそれを見たときに「性的モノ化」だとわかるだろう。……哲学的な論文が「性的モノ化」の特徴や基準を明確にしようとする限り、それは必ず失敗するだけでなく、まさに解明しようとしている当の現象を見逃してしまうことになる。(Bauer 2015, part I)。

ナンシー・バウアーは、「性的モノ化」というフェミニスト的な概念が、世界とそこでの自らの経験を理解する方法を変更するフェミニストの転換の一環として作られたものであると説明する。この問題の捉え方の転換によれば、女性が広範で体系的、継時的、構造的な不利を経験する状況において、女性を知覚し表象する特定の方法が、女性に物質的および心理的な害を与える傾向があるということになる。バウアーは、ある人がこの転換に参加すれば、「性的モノ化」という用語が関連する現象を「照らし出す」ようになり、その人は現代文化の至る所でモノ化を目にするようになる」と主張している。たとえその人が、モノ化の特徴や基準を正確に特定できる立場にいない場合でも、これは成り立つ。バウアーは、ある種のケースにおける「照らし出し」は、それまで見えなかったものが見えるようになるという回心の経験の形を取ることがあると説明している。彼女にとって、「照らし出し」というメタファーは、性的モノ化や、世界を体系的かつ規範的に理解する文脈で

のみ意味を持つ他の用語を考える上で非常に重要である。この文脈を彼女は「世界観」と呼んでいる (Bauer 2015, part II)。

7 結論

確かに、モノ化は定義が難しい概念である。ヌスbaumもこれを認めており、この概念は「滑らか」であり「多様」であると述べている (Nussbaum 1995, 251)。モノ化を定義できるとすれば、どのように定義するのが最適なのか、また、この概念を道徳的に非難されるものに限定すべきか、それとも日常生活において互いを見たり扱ったりする方法の無害または肯定的な側面を含むように拡大すべきかは、現在も議論が続いている。最近のフェミニスト研究の多くは、モノ化の包括的な哲学的分析に焦点を当てており、この概念に対するより完全で一貫した理解につながることを期待されている。

参考文献

- Altman, Andrew and Watson, Lori, 2019, *Debating Pornography*, Oxford: Oxford University Press.
- Assiter, Alison, 1988, “Autonomy and Pornography”, in *Feminist Perspectives in Philosophy*, M. Griffiths and M. Whitford (eds.), Bloomington: Indiana University Press.
- Bartky, Sandra-Lee, 1990, *Femininity and Domination: Studies in the Phenomenology of Oppression*, New York: Routledge.
- Bauer, Nancy, 2015, *How to Do Things with Pornography*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- , 2011, “Beauvoir on the Allure of Self-Objectification”, in *Feminist Metaphysics*, Feminist Philosophy Collection, Charlotte Witt (ed.), Springer Science+Business Media B.V., 117–129.
- de Beauvoir, Simone, 1961, *The Second Sex*, New York: Grune and Stratton.
- Bordo, Susan, 1993, *Unbearable Weight*, Berkeley, CA: University of California Press.
- Bordo, Susan, 1999, *The Male Body*, New York: Farrar, Straus and Giroux.
- Cameron, D., and E. Frazer, 2000, “On the Question of Pornography and Sexual Violence: Moving Beyond Cause and Effect”, in *Feminism and Pornography*, D. Cornell (ed.), Oxford: Oxford University Press, pp. 240–253.
- Davis, Nancy, 1984, “Using Persons and Common Sense”, *Ethics*, 94(3): 387–406.
- Doyle, Tony, 2002, “MacKinnon on Pornography”, *Journal of Information Ethics*, 11(2): 53–78.
- Dworkin, Andrea, 1974, *Woman Hating*, New York: Dutton.
- , 1989, *Pornography: Men Possessing Women*, New York: E.P. Dutton.
- , 1997, *Intercourse*, New York: Free Press Paperbacks.
- , 2000, “Against the Male Flood: Censorship, Pornography, and Equality”, in *Oxford Readings in Feminism: Feminism and Pornography*, Drucilla Cornell (ed.), Oxford: Oxford University Press, 19–44.
- Dworkin, Ronald, 1991, “Liberty and Pornography”, *New York Review of Books*, XXXVIII, 14.
- , 1993, “Women and Pornography”, *New York Review of Books*, October 21, 1993, p. 36.
- Green, Leslie, 2000, “Pornographies”, *Journal of Political Philosophy*, 8(1): 27–52.
- Halwani, Raja, 2008, “Virtue Ethics, Casual Sex, and Objectification”, in *Philosophy of Sex*, fifth edition,

- Alan Soble and Nicholas Power (eds.), Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 337–352.
- , 2017, “Casual Sex, Promiscuity, and Objectification”, in *Philosophy of Sex*, seventh edition, Raja Halwani, Alan Soble, Sarah Hoffman, Jacob M. Held (eds.), Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 401–420.
- , 2010, “Sexual Objectification”, in *Philosophy of Love, Sex, and Marriage: An Introduction*, New York: Routledge, 186–226.
- , 2018, “Sexual Objectification”, in *Philosophy of Love, Sex, and Marriage: An Introduction*, second edition, New York: Routledge, 241–279.
- Hampton, Jean, 1999, “Defining Wrong and Defining Rape”, in Keith Burgess-Jackson (ed.), *A Most Detestable Crime*, Oxford: Oxford University Press, 118–156.
- Haslanger, Sally, 1993, “On Being Objective and Being Objectified”, in *A Mind of One’s Own. Feminist Essays on Reason and Objectivity*, Louise M. Antony and Charlotte Witt (eds.), Boulder, San Francisco, Oxford: Westview Press, 209–253.
- , 1999, “What Knowledge Is and What It Ought To Be: Feminist Values and Normative Epistemology”, *Philosophical Perspectives*, 13: 459–480. [Preprint of Haslanger 1999 available online]
- , 2000, “Gender and Race: (What) Are They? (What) Do We Want Them To Be?”, *Noûs*, 34(1): 31–55. [Preprint of Haslanger 2000 available online]
- Herman, Barbara, 1993, “Could It Be Worth Thinking About Kant on Sex and Marriage?”, in *A Mind of One’s Own. Feminist Essays on Reason and Objectivity*, Louise M. Antony and Charlotte Witt (eds.), Boulder, San Francisco, Oxford: Westview Press, 53–72.
- Huseynzadegan, Dilek, 2019, *Kant’s Nonideal Theory of Politics*, Chicago: Northwestern University Press.
- , 2018, “For What Can the Kantian Feminist Hope? Constructive Complicity in Appropriations of the Canon”, *Feminist Philosophy Quarterly*, 4(1). doi:10.5206/fpq/2018.1.3
- , 2015, “Kant’s Political Zweckmässigkeit”, *Kantian Review*, 20(3): 412–444.
- Huseynzadegan, Dilek, and Jordan Pascoe, 2022, in Lettow and Pulkkinen (eds.) 2022, 31–49.
- Kant, Immanuel, 1785, *Groundwork of the Metaphysics of Morals*, (Series: Cambridge Texts in the History of Philosophy), Mary Gregor (ed.), Cambridge University Press, 1998.
- , 1797, *The Metaphysics of Morals*, (Series: Cambridge Texts in the History of Philosophy), Mary Gregor (ed.), Cambridge: Cambridge University Press, 1996.
- , “Kant on the Metaphysics of Morals: Vigilantius’s Lecture Notes”, in *Lectures on Ethics*, P. Heath and J. B. Schneewind (eds.), Cambridge: Cambridge University Press, 1997.
- , *Lectures on Ethics*, Louis Infield (trans.), New York: Harper and Row, Publishers, 1963.
- Korsgaard, Christine, 1996, *Creating the Kingdom of Ends*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Langton, Rae, 1993, “Beyond a Pragmatic Critique of Reason”, *Australasian Journal of Philosophy*, 71(4): 364–384.
- , 1995, “Sexual Solipsism”, *Philosophical Topics*, 23(2): 181–219.
- , 1996, “Pornography: A Liberal’s Unfinished Business”, *Canadian Journal of Law and Jurisprudence*, 12(1): 109–133.
- , 1997, “Love and Solipsism”, in *Love Analysed*, R.E. Lamb (ed.), Boulder, CO: Westview Press,

123–152.

- , 2000, “Feminism in Epistemology: Exclusion and Objectification”, in M. Fricker and J. Hornsby (eds.), *The Cambridge Companion to Feminism in Philosophy*, Cambridge: Cambridge University Press, 127–145.
- , 2004, “Projection and Objectification”, in *The Future for Philosophy*, Brian Leiter (ed.), Oxford: Clarendon Press, 285–303.
- , 2009, *Sexual Solipsism: Philosophical Essays on Pornography and Objectification*, Oxford: Oxford University Press.
- LeMoncheck, Linda, 1985, *Dehumanizing Women: Treating Persons as Sex Objects*, Totowa, NJ: Rowman & Littlefield.
- Lettow, S., and T. Pulkkinen (eds.), 2022, *The Palgrave Handbook of German Idealism and Feminist Philosophy*, Cham: Palgrave Macmillan, doi:10.1007/978-3-031-13123-3_4
- MacKinnon, Catharine, 1987, *Feminism Unmodified*, Cambridge, Massachusetts, and London, England: Harvard University Press.
- MacKinnon, Catharine, 1989a, *Towards a Feminist Theory of the State*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- , 1989b, “Sexuality, Pornography, and Method: Pleasure under Patriarchy”, *Ethics*, 99(2): 314–346.
- , 1993, *Only Words*, Cambridge Massachusetts: Harvard University Press.
- , 1995, “Speech, Equality, and Harm: The Case Against Pornography”, in *The Price We Pay: The Case Against Racist Speech, Hate Propaganda, and Pornography*, L. Lederer and R. Delgado (eds.), New York: Hill and Wang, 301.
- , 1997, “Pornography Left and Right”, in *Sex, Preference, and Family: Essays on Law and Nature*, M. Nussbaum (ed.), Oxford: Oxford University Press, 102–125.
- , 2006, *Are Women Human? And Other International Dialogues*, Cambridge, Mass.: Belnap Press.
- Mappes, Thomas, 2002, “Sexual Morality and the Concept of Using Another Person”, in *The Philosophy of Sex: Contemporary Readings*, A. Soble (ed.), Lanham, Maryland: Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 207–223.
- McLeod, Carolyn, 2003, “Mere and Partial Means: The Full Range of the Objectification of Women”, *Canadian Journal of Philosophy*, Supplementary Volume 28: 219–244.
- Morgan, Seiriol, 2003, “Dark Desires”, *Ethical Theory and Moral Practice*, 6 (4): 377–410.
- Nagl-Docekal, Herta, 2022, “Feminist Perspectives on Kant’s Conception of Autonomy: On the Need to Distinguish between Self-Determination and Self-Legislation”, in Lettow and Pulkkinen (eds.) 2022, 51–72. doi:10.1007/978-3-031-13123-3_4
- Nussbaum, Martha, 1995, “Objectification”, *Philosophy and Public Affairs*, 24(4): 249–291.
- Nussbaum, Martha, 1999, *Sex and Social Justice*, Oxford: Oxford University Press.
- , 2007, “Feminism, Virtue, and Objectification”, in *Sex and Ethics: Essays on Sexuality, Virtue, and the Good Life*, R. Halwani (ed.), New York: Palgrave Macmillan, 49–62.
- Papadaki, Lina, 2007, “Sexual Objectification: From Kant to Contemporary Feminism”, *Contemporary Political Theory*, 6(3): 330–348.
- , 2008, “Women’s Objectification and the Norm of Assumed Objectivity”, *Episteme*, 5(2): 239–250.

- , 2010a, “What is Objectification?”, *Journal of Moral Philosophy*, 7(1): 16–36.
- , 2010b, “Kantian Marriage and Beyond: Why it is Worth Thinking about Kant on Marriage”, *Hypatia*, 25(2): 45–61.
- , 2015, “What is Wrong About Objectification?”, in *Current Controversies in Political Philosophy*, Thom Brooks (ed.), London: Routledge, 87–99.
- , 2017, “Sexual Objectification”, in *Philosophy of Sex*, seventh edition, Raja Halwani, Alan Soble, Sarah Hoffman, Jacob M. Held (eds.), Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 381–400.
- Parfit, Derek, 2011, *On What Matters*, Oxford: Oxford University Press (especially Chapter 9, “Merely as Means”).
- Pascoe, Jordan, 2023, *Kant’s Theory of Labour*, Cambridge: Cambridge University Press,
- , 2023, “Beyond Consent: On Setting and Sharing Sexual Ends”, *Philosophies*, 8(2): 21. doi: 10.3390/philosophies8020021
- , 2018, “A Universal Estate? Why Kant’s Account of Marriage Speaks to the 21st Century Debate”, in *Kant’s Doctrine of Right in the Twenty First Century*, Larry Krasnoff and Nuria Sanchez Madrid (eds.), Cardiff: University of Wales Press.
- , 2015, “Domestic Labor, Citizenship, and Exceptionalism: Rethinking Kant’s ‘Woman Problem’”, in *Journal of Social Philosophy*, 46(3): 340–356.
- Pulkkinen, Tuija, 2022, “Reason and the Transcendental Subject: Kant’s Trace in Feminist Philosophy”, in Lettow and Pulkkinen (eds.) 2022, 73–89.
- Sanford, Stella, 2022, “The Taxonomy of ‘Race’ and the Anthropology of Sex: Conceptual Determination and Social Presumption in Kant”, in Lettow and Pulkkinen (eds.) 2022, 131–150.
- Saul, Jennifer, 2003, *Feminism: Issues and Arguments*, Oxford: Oxford University Press.
- , 2006, “On Treating Things as People: Objectification, Pornography and the History of the Vibrator”, *Hypatia*, 21(2): 45–61.
- Shorter-Bourhanou, Jameliah Inga, 2022, “Black Feminism and Kantian Universalism”, in Lettow and Pulkkinen (eds.) 2022, 13–30.
- Shrage, Laurie, 1989, “Should Feminists Oppose Prostitution?”, in *Ethics*, 99(2): 347–361.
- Soble, Alan, 2002a, “Sexual Use and What to Do about It: Internalist and Externalist Sexual Ethics”, in *The Philosophy of Sex: Contemporary Readings*, A. Soble (ed.), Lanham, Maryland: Rowman & Littlefield Publishers, Inc., pp. 259–288.
- , 2002b, *Pornography, Sex, and Feminism*, Prometheus books.
- Vadas, Melinda, 1987, “A First Look at the Pornography/Civil Rights Ordinance: Could Pornography Be the Subordination of Women?”, *The Journal of Philosophy*, 84(9): 487–511.
- , 2005, “The Manufacture-for-use of Pornography and Women’s Inequality”, *The Journal of Political Philosophy*, 13(2): 174–193.
- Young, Iris Marion, 1979, “Is There a Woman’s World?—Some Reflections on the Struggle for Our Bodies”, *Proceedings of The Second Sex—Thirty Years Later: A Commemorative Conference on Feminist Theory*, New York: The New York Institute for the Humanities.
- , 2005, *On Female Body Experience: “Throwing like a girl” and other essays*, Oxford: Oxford University Press.